

巻 頭 言

「その能力その年齢その境遇に応じて、めいめいに自分の生（いのち）のよき経営者であるということは、人各々自ら教育するための何よりもよい第一の教課であります。そうしてまた生徒をして自ら教育することに熱心になるように導くことは何よりも大切な私たちの務めだと思います。」

（羽仁もと子「『自由学園』の創立」1921年2月）

現在自由学園では、創立100周年に向けて、「キリスト教精神を根底に据えて、常に一人ひとりを大切にし続ける学園、子どもたちも教職員も自ら学び続ける人になる学園、よりよい社会をつくる人が育ち続ける学園」という学校改革指針のもと、よりよい学校づくりへの取り組みを進めています。幼児生活団から最高学部まで、それぞれの発達段階に応じて重点は異なりますが、自由学園は確実にこの指針に従って前に進んでいます。

これらの改革指針はどれも自由学園が創立以来大切に考え、実践してきたものであり、新たに打ち出した方向ではありません。しかし今回あえてこれらを、次の100年に向かう未来への教育指針として言語化したのは、現在の社会と子どもたちが直面する課題を踏まえ、あるべき教育の姿を検討する中で、自由学園の原点であるこれらの教育原則こそが、今最も重要であると判断したためです。

「Education」には、江戸末以来さまざまな翻訳語があったそうですが、一説によれば「教育」という訳語が定着した背景には、明治40（1907）年の教育勅語の官定英訳があったと言われています。日本において「Education」は、臣民教育と結びれて広がったというわけです。

これに対し創立者は、この翌年の明治41（1908）年に、「エデュケーション（教育）なる言葉の意義」についてとして、「子供の心の内部に萌え出ている知情意の芽をひきのぼして、高く美しくしようというのが教育の本義」と述べています。さらに、「植物のように二葉からだんだんに成長して苗となり大木となる」子どもの成長にとって最も大切なことは、「自分みずからの伸びようとする意志」、つまり学び手の主体性であり、教育者には「よい園丁」として、「子供の心の芽を養い育ててのぼそうとする努力」が求められると語っています。

「『自由学園』の創立」を告げる文章には、「自ら教育する」という言葉が繰り返し用いられています。ここには、「教育」という言葉が持つ、大人が子どもを「教え育てる」という意味を乗り越えていくビジョン、すなわち、子どもたち自身が主体となって、自らを「教え育てる」学校を創りたいと願う、新しい教育への希望が示されています。

本年報には、「子どもたちも教職員も自ら学び続ける」ことを目指した、様々な実践の記録が掲載されています。生徒・学生たちが自ら選んだ課題の中に、社会をつくる主体としての問題意識に立ち、民主主義や人権、環境等の問題に触れ、よりよい社会のあり方を問う取り組みがいくつもあったことは、非常に頼もしく、希望のかつ自然な展開であったと感じています。

各部の取り組みを通じ、新しい学びの息吹をお感じ頂けましたら幸いです。

学園長 高橋和也